

編 集 後 記

医師臨床研修制度がはじまって13年目になり、今年もマッチングがおわりました。さらに、10月から新専門医制度が開始され、後期臨床研修は登録制になります。神経内科医になるためには今のところ基盤領域である内科専門医をまず取得する必要があります。このように神経内科医への道が大きく変わるなか、真の実力をもった神経内科医を育てていく工夫が求められています。

他の臨床科にもまして、神経内科は症例毎の症状、経過、検査結果について論理的に考え、病巣や原因疾患をしばり込んでいくことが重要と言われます。そのトレーニングの一環として、症例報告を書くことはとても役に立ちます。まず、患者をきちんと診察し、客観的なデータと共に記録する態度が必要です。また、既にわかっていることと、まだわかっていないことを明らかにし、人に伝わるような症例報告を書くには、その疾患について熟知する必要があります。自分で書くことは、自分で考えることです。Copy and pasteでは首尾一貫した論文にはならないでしょう。その上で、苦勞して完成した論文を投稿して、専門家の査読を受けることは、さらなる飛躍のチャンスとなります。普段

じかに相談できない専門家から、症例の多面的なみかた、分かりやすい記載方法、より深い考察のヒントなどを得ることができるのです。多くの論文は何度か著者と査読者のやりとりがあり、この間に当初のかたちとはかなり違った完成度の高い論文になることもめずらしくありません。このような過程こそが、ひとりひとりの神経内科医を育てる個人レッスンになっていると感じます。日本神経学会が日本語で投稿できる独自の雑誌を維持していることの意義には、このような若手の育成という側面もあると考えられます。私もかつて「臨床神経学」で鍛えていただいた経験があり、これからは査読者、編集者としてその恩返しができると思っています。

症例報告は臨床家にしか書けません。自分の経験した一例一例を大切に、どんな小さなことでも新たな知見があれば、症例報告をしてください。学会発表はその場かぎりになってしまいますが、英文抄録がPubMedで検索可能な本誌に掲載されれば、世界とつながることができます。会員のみなさまのご投稿をこころからお待ちしております。

(鈴木 匡子)

〈 編 集 委 員 〉

編集委員長 園生 雅弘 編集副委員長 高尾 昌樹
 編集委員 荒木 信夫 飯塚 高浩 池田 昭夫 亀井 聡
 鈴木 匡子 坪井 義夫 西野 一三 星野 晴彦
 編集委員(幹事兼任) 小野寺 理 新野 正明 三澤 園子

| | | | |
|---------|-------------------------------|--------------|--------------|
| 「臨床神経学」 | 第57巻 第10号 | 平成29年10月1日発行 | |
| 編 集 者 | 東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル | | 一般社団法人日本神経学会 |
| 発 行 者 | 東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル | | 高 橋 良 輔 |
| 印 刷 所 | 〔郵便番号 602-8048〕京都市上京区下立売通小川東入 | | 中西印刷株式会社 |

発 行 所 〔郵便番号 113-0034〕東京都文京区湯島二丁目 31 番 21 号 一丸ビル
 日 本 神 經 学 会

郵便振替口座 東京 00120-0-12550

TEL. 03-3815-1080 FAX. 03-3815-1931

ホームページアドレス：<http://www.neurology-jp.org/>